

『陶庵夢憶』序

平伯が『陶庵夢憶』*を重刊しようとして、わたしに序を書かせた。わたしが以前は越の人間であったからである。

光緒二十三年（一八九七年）祖父が事件で杭州府の獄に繋がれ、わたしは宋姨太太〔祖父の妾〕について花牌楼に住み、二、三日ごとに一度彼を見舞いに行った。そこで初めて『夢憶』を見た。「硯雲甲編」本で、その中には他に『長物志』や『槎上老舌』があつてやはりその時わたしが喜んだ書である。張宗子の著作は多いようだが、『夢憶』以外にわたしは『於越三不朽図贊』、『瑯嬛文集』、『西湖夢尋』の三種を読んだだけで、彼が選んだ一卷の『冰雪文』はかつて大路の古本屋で見たことがあるが、吹っかけられた値段があまりに高かったので買うことができなかつた。わたしは『夢憶』が一番良いと思う。『文集』の中にもいい文章はあり、『夢憶』の「泰山を紀す」などはほとんど『岱志』の節本であるし、人物を書いた何篇かも「五異人伝」と似たところが多いけれども、『三不朽』は彼の遺民の気の具体的な表れであり、姚長子などいくつかの画像はいささか疑わしいところがあるが、他の大人物にはおそらく多く基づくところがあるのだろう。王謔庵の像を見たがこれは捏造できないと思う。というのはそれにはとても個性があるからである。

『夢憶』は大抵がどれも面白い。「現在」については、だれもがたいい満足せず、しかもこの身は現在という情景の中にあつて、要するにいささかぼやけていて、玩味の暇がない、だから人は多く現世から逃げる傾向があり、ただ夢想あるいは回想だけが最も甘美な世界だと思ふのである。ユートピアを説く者はなんでも願いの叶う白昼夢を見ているのである。老年の人間は若い頃の生活を思い出し愉快に、いや、昨夜のことで今日よりは面白いと思ふのである。これは必ずしも保守か何かによるものではなく、実はそうした過去がようやく我々のゆっくりした摩挲賞翫に耐えるようになったので、たとい一二筆加減したところで、大したことはないのである。遺民の感歎もこの類に属するが、それがもう少し深切であつて、白髪の宮人が天宝の遺事を説くのととはまた少し違う。あるいはちょうど寡婦の追懐に比せられるだろう。『夢憶』はそうした文章のよいものであり、追懐されるのが又明朝の事であるから、さらにわたしには面白いのである。わたしは決して民族革命思想の影響で、特に明朝になにかよしみがあるわけではなく、実を言うと、ただ清朝が信用ならないだけである——辮髪を一本背中に垂らして何が風雅なものか。ちょうど纏足の女人を美人だとは信じないように。

『夢憶』が記しているのは多くが江南の風物であり、紹興の事もその一部分を占めているが、それは又わたしの知っていることとは何とも違う別の紹興である。会稽は禹域だと言うけれども、結局はやはり辺鄙な小郡であり、終には小家の子の相を免れない。大禹の陵墓、平水、蔡中郎の柯亭、王右軍の戒珠寺、蘭亭など、名勝地について述べたのはもともと少なくない。この他に普通の山や川でも、どこでも気の向くままに遊山して、いささかの佳趣を得ることができる。もしあなたが適当な遊び方を心得ているならば。だが張宗子は都会の詩人であり、彼が注意するのは人事であつて天然ではない。山水は彼が書く生活の背景でしかない。この点を言うと、わたしは

『夢憶』の一二条を思い出す。紹興にとっては実に今昔の感に耐えない。明朝の人はたとい別に取るに足るところがなくとも、彼らの狂は少なくとも要するに敬服に値する。こうした狂は今となっては欠片も残っていない。いつからか知らないが、紹興の風水が変わったせいだろうか、当地が出す人材はほとんど師爺と両替屋の番頭の二種に限られ、もっぱら苛酷精細のやり手で売り出し、彼の豪放な気象はすでに全く消えてしまい、天下を駆け回って『水滸伝』の人物を探そうなどというあの気魄はもう誰も理解するものがないし、実行ときてはさらに言うまでもない。彼らは確かにすでに明朝の放蕩息子ではなく、田舎の土着の金持ちに変わったのである。これが結局福なのか禍なのか分からない！「城郭は故の如きも人民は非なり」、『夢憶』を読んだ後思わず仙人丁令威のこの詩を思い出した。

張宗子の文章は随分と趣味がある。これもわたしが『夢憶』を好きな一つの理由である。わたしはいつもこう思う。現代の散文は新文学の中で外国の影響を受けること最も少ない。これは文学革命と言うより文芸復興の産物と言ったほうがよい。文学発展の途上では復興と革命は同じように進展ではあるけれども。理学と古文とが全盛でなかった時に、抒情的な散文はすでに相当の発展を遂げていたが、学士大夫の眼中には自ずとそれほど重視されなかった。我々が明清の名士派の文章を読むと、現代文の情趣とほとんど一致するように思う。思想的にはもちろん若干の距離があるのは免れ難いけれども。だが明人が表す礼法に対する反動はなかなか現代の息づかいを持っている。張宗子は大家の子弟であり、『明遺民伝』は彼を「衣冠揖讓、綽として旧人の風軌あり」と称し、人のご機嫌を伺う山人ではなかった。彼の洒脱な文章は大抵性情の流露に出るもので、読んでも嫌にならない。『夢憶』は彼の文集の選集と言え、わざと使った怪文句の他は、何篇かは本当に不壊不朽に書かれていると思う。もしわたし自身が一二篇でも書けるなら、もう十分に満足である。だがこれは羨みもできないし、真似もできない。

平伯が『陶庵夢憶』を重刊しようとするのは、おおいに賛成である。今回は決してわたしが以前越の人間であったからではなく、『夢憶』がわたしの好きな書物であるからである。

民国十五年十一月五日、京兆宛平にて。

※初出：1926年12月18日『語絲』第110期

* 『陶庵夢憶』 松枝茂夫訳岩波文庫本がある。